山口大学教育学部研究論叢　第68巻　95頁～103頁　2019年1月

日本語学習のためのコラムの利用について
－授業形式による効果の違いに関して－

ヤヘルニツカ　リリヤ*・田中　理絵

The Effectiveness of Using Column Articles as Japanese Language Teaching Materials for Different Types of Lessons

Ягельницька Лілія*・TANAKA Rie

（Received September 28, 2018）

Ⅰ．はじめに

日本の国語教育ではNewspaper in Education（以下NIE）という教育活動が積極的に行われている。小原（2011）によると、NIEとは、新聞と教育とが連携し、新聞活用教育を実践的に研究して、成果を組織的に発展させていくことを目的とする教育活動を指す。具体的には、ニュースや情報の整理・分析・再構築を通じて、自ら考え判断する能力を育むことを目的とする。さらには、学習者が自分の考えを日本語で表現し、外部に向けて発信することでコミュニケーションできることを目標としている。

新聞を教育場面で利用するには、新聞のもつ特徴を理解しておかなければならない。すなわち、新聞は情報が詳しく、ニュースの背景について考えられ、社説や投書欄などでさまざまな考えを知ることができ、他のマス・メディアと比較してもその信頼性が高い。そのため、授業で新聞を活用することで「思考力・判断力・表現力の育成」を図ることができる。松崎（2005）によると、国語の授業で新聞を活用することで、生徒は新聞に親しみを持つことができ、積極的な学習態度が身につくという。しかし現在、生徒の興味はテレビやインターネット、ゲームなどに向かっており、社会問題に対する興味や知識が乏しくなっている。社会問題に関心が薄い生徒にとって、政治経済や国際面の記事、社説を読むことは難しいだろう。そこでNIEでは、いきなり一般記事や社説を読ませるのではなく、新聞コラム（以下、コラム）を活用することが多い。

『マス・コミュニケーション辞典』（1971）によると、コラムとは新聞の短評欄のことであり、随筆続き漫画などと共にフィーチャといわれる。コラムは、無味乾燥な社説に比べて、簡単明瞭に問題点を浮き彫りにする性格を持ち、なかでもユーモアと皮肉を織り交ぜながら、かなり主観を入れた痛烈な社会・政治批判を行うものに読者の人気が集まってきた。また、コラムは朝刊の一面に掲載されるなどその新聞社の顔のひとつとして位置づき、起承転結の構成を約750字にまとめる必要があるため、その文章は名文の代表格と評価されている。

このように、コラムは時事的な問題を扱いながらも、無駄のない簡潔な文章で、要点を正確につかみやすく、表現する力を伸ばすのに適した教材である。そのため、中学生・高校生を対象とした「国語」の授業で活用されてきた。先行研究によると、教材としてコラムを使用する理由としては、①筆者の主張・価値観が明確に打ち出されているために読み手の思考をからませやすいこと、②１日分の紙面に複数の文章が掲載されているので、生徒が自分の興味によってテーマを選択できること、③そのテーマが日常生活に密着していることが比較的多いために、生徒の関心度が高いこと、④読者の年齢層が厚く、⑤文章の難易度に幅があり、生徒の学力差に対応できることが挙げられている。こうした理由から、特に中学生・高校生には、文章修練の点でよいテキストであると思われる。

Ⅱ．問題と目的

以上のように、日本語母語話者向けの「国語」の授業でコラムを活用することは、テキストの理解力、速読解力、言語力の向上に効果的であろう。しかしコラムは、日本語母語話者に対してだけでなく、外国人日本語学習者に対する「日本語」の授業でも活用できるのではないだろうか。こうした関心のもと、本研究では、日本語の授業で新聞コラムを利用することでどのような効果が見

＊山口大学大学院教育学研究科

込めるか、あるいは、授業でどのように活用すればよいかという点について考察したいと考えた。

外国人日本語学習者を対象とした日本語の授業は、多くの場合、日本語能力試験のための教科書中心のものであり、そのため生の日本語の文章を読む経験が不足しがちである。コラムは、外国人向けの日本語能力試験の準備のためのテキストと異なり、生の日本語テキストであり、読者として日本人が想定されているため、外国人にとっては難解な文章が多い。また、コラムには、限られた紙面で多くの情報を伝えるという物理的な制約があり、他の表現手段に比べると、文体的・語彙的・文法的に濃縮された言語表現であるため、正しく理解するためには特別の訓練・練習が必要である。したがって、外国人学習者向けの日本語の授業でコラムを教材として有効に採用するためにはどのような訓練・練習が必要なのか、また、コラムは「読解」の授業教材にしかならないのかという問題についても併せて考察する必要があると考える。そこで本研究では、実際にさまざまな形式の授業でコラムを教材として活用することで、その効果を明らかにすることを目的とした。

Ⅲ．調査方法

［調査対象者・時期］山口大学の「日本語4A総合」を受講する留学生に設定。国際総合科学部の留学生27名と、その他の学部の留学生29名を対象とする２つのクラスにおいて、2018年４月16日～2018年５月21日、それぞれ５回ずつ筆者（ヤヘルニツカ）が授業を行った。授業は、受講生の許可を得て、すべて録画している。

［調査内容］留学生向けの「日本語4A総合」の授業で、コラムを教材として採用し、次の３つの授業形式で授業実践を行った。

授業タイプ１．コラムの文章構造、文法、表現、新出単語等の説明を行い、コラム記事の読解とディスカッションを行う（コラム①、②、④）

授業タイプ２．受講生による記事の分析に従い、同じテーマに関する異なる新聞社のコラムの比較を行う（コラム③）。

授業タイプ３．比較的大きなグループディスカッション。「コラム⑤」の授業では「コラム④」の授業で教材とした記事のテーマに関するディスカッションを行なった。

授業に加えて、受講生の感想やアンケートを実施している。それらの結果にもとづいて、それぞれの形式の授業の効果を分析していく。

Ⅳ．実践研究について

Ⅳ－Ⅰ．授業タイプ１（コラム①、②、④の授業）

タイプ１の授業時間は60分であり、授業目的に「実際の日本語の文章を読むことに慣れること」「テキストを読んで、その構造を知ること」「文法、単語や表現などを学習すること」「記事の内容について考えることでテキストのテーマ、筆者の意見を分析できるようになること」を設定した。そのため、まず日本語のテキストの構造を説明し、学習者にとって難しいであろう文法や表現を説明した後に、記事の読解、キーワードの検索やディスカッションを行った。

学習者の関心の高いテーマの選択の必要性について

最初に、学習効果に影響を与える記事の内容について説明したいと思う。教材として用いた記事は全国紙のデジタル新聞から選んだ。記事の内容としては、時事問題に触られるもの、留学生にとって身近で関心の高い問題についての書かれたものである。特定の国を非難・中傷することにならないように注意をして記事を選んだ。

具体的には、「コラム①」は毎日新聞「余録」2018年４月２日「『失礼ですが、どなた様ですか』と聞いたはずが…」という将来に就活生になる留学生にとって役に立つ情報のあるコラムである。現在、問題になっているスマホ世代のコミュニケーション能力の低下、新入社員の問題、職場の文化について書かれていた。「コラム②」は毎日新聞「余録」2018年４月５日「目借時ゆふべのままの紙とペン…」という勉強、遊びなどの理由で睡眠が不足している若者に親しみのある記事を選んだ。このコラムの筆者は、眠りのリズムに集中していると共に、今はしっかり寝ることができる時代ではないことについて述べている。「コラム④」は、2018年２月26日の毎日新聞「余録」「学校にはなぜ制服があるのか…」というコラムの記事である。学校の制服の意味に関する、どんな学習者でも必ず親しみのもてるテーマを選択した。2018年の２月下旬に日本で話題になっていたのは東京・銀座の区立泰明小学校がアルマーニの標準服を採用するという話であった。外国人日本語学習者にとって、アルマーニの制服というテーマは面白いと考えた。実際、学習者の感想シートを読むと、この三つのテーマの中で一番興深かったのは「コラム④」の制服に関するテーマであり、自国でも制服に関する議論があるため親しみを感じたそうである。例えば、学習者のコメントは次の通りである。

S15　「記事のテーマは面白かった。日本の制服についての話を初めて聞いた。また、制服の価値はびっくりした。私も中学時代に制服を着たので、日本の制服に関する話は面白いだと思う。」（中国；JLPT：無）[1]

S45　「授業はとってもよかった。制服の問題を差

[1]括弧には、受講生の出身や日本語能力試験（Japanese Language Proficiency Test　―　JLPT）のレベルが書かれてある。日本語能力試験には５つのレベルがあり、一番やさしいレベルがN5で、一番難しいレベルがN1である。

して、学生時代にもどったみたい。記事の内容は面白かった。ちかい問題し、関心を持っているもんだいでした。」（韓国；JLPT：N4）

「コラム④」の制服に関するテーマは「面白くなかった」と答えた学習者は一人もいなかった。しかし「コラム①」や「コラム②」のテーマについては、学習者の感想は異なっていた。次のS1～は、「コラム①」に関する感想である。

S1　「テーマは面白かった。僕はそのような日本の社会的な事についての記事が面白いと思う。」（ハンガリー；JLPT：N4）

S13　「面白かった。私達準卒業生としては、ありがたい知識と思います。」（台湾；JLPT：N2）

S2　「私にとって、かいしゃのテーマはそんなにおもしろくない。」（ハンガリー；JLPT：—）

S9　「テーマは普通。読んだ後で「そうだ」だけ感じます。」（台湾；JLPT：N2）

S24　「テーマはつまらなかった。あんまりそういう硬い話が好きではありません。」（香港；JLPT：N1）

感想シートを分析すると「コラム②」のテーマは興味深いという意見があったが、一方で、睡眠不足は世界共通のテーマであり、もっと日本にしかない問題や日本の文化などに関する記事を読みたいという意見もみられた。

S16　「俳句とかけっこう難しいと思いますが、今日の授業の『目借時のゆふべのままの紙とペン…』は理解しやすいです。そして、このタイトルを見ると、ついこの意味を好奇心を持って、読み続きたいです。」（中国；JLPT：N1）

S20　「テーマは面白かった。最近、睡眠時間で悩んでいますから。」（中国；JLPT：N1）

S52　「テーマは普通です。今日はテーマがちょっとむずかしかったです。」（韓国；JLPT：無）

S23　「テーマは普通。このテーマは日本だけではない、香港もある。世界の問題です。」（香港；JLPT：N4）

テーマへの関心度が、日本語学習者に影響を与えると言える。その理由は、例えば「コラム④」を興味深いと答えた学習者全員が、他の授業と比べてディスカッションに積極的に参加したことにもみられる。自分に親しいテーマであれば、記事はいかに難しくても、自分の意見を述べやすいということが明らかになった。反対に、テーマが難しすぎる場合や、あるいは学習者に全く興味がない場合、内容の理解レベルや授業への参加度は低くなる傾向がみられた。

（1）コラムのテキストの構造について

コラムを活用した授業を始める前に、アンケートを実施したところ、ほとんどの留学生は新聞を読んだことがなかった。そのため、コラムの構造について説明をする必要があった。

そこで、テキストの中で事実と筆者の意見を分別できるようになるために、コラムには、①筆者の感情・態度・意見・見解・要望・考え方などを表す「コメント文」と、②歴史的な事実、一般的な知識等に関する情報を伝える「非コメント文」の２つのタイプがあることを説明した。特に、学習者に注意してほしかったのは、コメント文の特別な表現である。たとえば、「…のだ、…からだ、…わけだ、…言える、…思う、…感じる、…ほしい、…だろう、…らしい、…かもしれない、…ではない（だろう）か。」という語尾表現に注目することでテキストの中で筆者の意見はどこにあるかが分かりやすくなる。

次に、日本語母語話者向けの「国語」の授業でコラムの記事を採用する理由として、「起承転結」というテキストのわかりやすい構造があげられる。しかし、外国人の日本語学習者は「起承転結」という構造を知らないため、日本人と同じような読み方はできない。留学生がテキストの内容理解を深めるためには、自然な読解法を身につける必要があるだろう。そのために、新しい語彙や文法を学ばせることに限らず、文構造を理解させることも重要であると考える。この理由で、初回の授業（コラム①）で、例文を見せながら「起承転結」の説明を行った。

＜授業内容＞「起」（Topic Presentation）は事実や出来事を述べるところ、「承」（Topic Development）は『起』で述べたことに関することを述べる。解説したり、それによって起こる問題点を述べたり、感想、意見を述べたりする部分。「転」（Surprise Turn）は『起承』とは別のことがらを持ち出すところ、「結」（Conclusion）は全体を関連づけてしめくくるところという説明の後に、具体例を挙げた。学習者の理解を深めるために、全員で「コラム①」、「コラム②」、「コラム④」の記事を読んでから、「起承転結」によるテキストを分析させた。学習者の感想によると、この作業のおかげで、コラムのテキストの内容がわかりやすくなったようである。

S7　「起承転結の方法は記事を読みやすいになると思う。」（タイ；JLPT：無）

S14　「文章の起承転結を勉強して、今後文章を書く時、これを使えます。この部分はとても面白いと思って、大好きです。」（中国；JLPT：無）

S28　「コメント文における表現と文法の使い方が深く理解するようになりました。それは日本語勉強にも役

に立ちました。」（中国；JLPT：N2）

（２）文法や表現の説明について

日本語母語話者が、自然にテキストの内容が読解できるのは、それを可能にする十分な文法的・言語的知識の支えがあるからである。しかし外国人学習者にはその言語的知識が不十分である。したがって、いきなり生のコラムの記事を読むことは困難であるため、それぞれの授業の１週間前に、学習者にはコラムの記事を渡すとともに、テキストに出てくる文法や単語の説明リストを渡した。しかし、クラスの中で学習者の日本語のレベルが異なったため、文法や表現の説明リストを渡すことだけは不十分であると考え、コラム①、コラム②、コラム④の中で特に難しい文法や表現の説明を行った。

コラムの読解は、多くの学習者にとって新聞記事を初めて読む体験であったため、留学生にとって「～である」、「～という。」、「～そうだ。」、「～だろう。」等の難しそうな表現を説明した。特に「コラム②」のテキストには、俳句、和歌、中国の歌などがあったため、その説明が不可欠であった。また、「うとうとする」「睡眠負債」「睡眠不足」のような日常会話にも役に立てる表現も説明した。コラムを活用した授業の目的は、学習者の語彙、文法などの言語的知識を高めることでもあるため、授業中の単語の詳しい説明は有効であると考える。学習者の感想でも、新しい文法や単語を学ぶことで、テキストの読解は読みやすくなっているということであった。

文法の説明に対する留学生の感想は次の通りである。

（コラム①）S18　「授業はとってもよかった。新聞を通して、文法と単語をおぼえると、楽になります。」（中国；JLPT：N2）

（コラム②）S1　「新しい表現を沢山勉強した。単語だけではなく、文化についてもよく習った。」（ハンガリー；JLPT：N4）

（コラム②）S33　「俳句とか文学知識も勉強になってよかった。」（中国；JLPT：N1）

（コラム④）S23　「シート（文法と表現の説明リスト）と一緒に読むと、ちょうどよかった。たくさん難しい字です。」（香港；JLPT：N4）

（３）キーワードの検索について

コラムの内容を理解しやすくさせるため、受講者全員で記事を読んでから、記事の一番代表的な言葉、記事の内容や筆者の意見を一番伝える言葉をキーワードとして探させた。この作業は、学習者の理解レベルを把握するだけでなく、授業の難易度上昇とともに学習者の成長もわかるようになる。実際、キーワードを選ぶ作業によって情報が整理され、内容がさらにわかりやすくなったとの感想がみられた。

S22「授業はとってもよかった。キーワードで全文を理解できるようになりました。」（コラム①中国；JLPT：N2）

S21の感想は「キーワードで文をよく理解できました。」（コラム②：中国；JLPT：N1）

コラム①、②、④の授業にあったキーワード選択の作業を分析した上で、次のポイントが明らかになった。

① 日本語のレベルが高い学習者は内容をしっかり伝える単語を選択したこと。

② 日本語のレベルが高くない学習者はキーワードを選択するときに内容を伝える単語だけではなく、感情的な単語、または、学習者にとって新しい単語、意味が難しい単語をよく選択したこと。

③ コラム①、②、④の授業にあったキーワードを探す作業では、日本語のレベルが低かった学習者の伸びは十分ではないこと。

④ コラムの「起承転結」という構成は一般的であり、記事のテーマは大体「起」、あるいは「承」から明らかになり、筆者の意見は大体「結」、場合によって「転」から明らかになる。しかし、日本語学習者がキーワードを選択するときに、「起」や「承」だけに集中しすぎた傾向があった。内容からみるとコラムの記事で一番わかりにくかったところは「転」であるが、「転」からキーワードを選択した学習者は少なかった。

（４）ディスカッションについて

タイプ１の授業（コラム①、②、④）の最後に、学習者とのディスカッションや意見交換を行った。文法や単語の意味を説明し、全員で記事を読み、キーワードを決め、「起承転結」によってテキストを分析してから、学習者の記事の内容に関するイメージが深まったと考えるため、「この記事のテーマは何だと思いますか。」「筆者の言いたいことは何ですか」という２つの質問をし、ディスカッションを行った。

学習者が出したテーマや筆者の意見はとても綺麗な文章でまとめてあり、内容についても正確な答えであった。しかし、「コラム①」の授業のディスカッションの時にほとんどの学生は黙っていて、積極的ではなく、意見を出す人は同じ人であった。ディスカッションに参加した人は日本語の上級レベルの留学生であった。

「コラム①」のディスカッションは、全員参加した活発なものではなかったため、「コラム②」のディスカッションでは個々で考えるのではなく、学習者を幾つかの

グループに分け、グループで考えさせることにした。

その結果として、テーマや筆者の言いたい事について、グループ内ディスカッションの学習者の参加度が高く、それぞれのグループの意見は似ていたが、学習者のまとめ方によって、それぞれのグループの日本語レベルの違いが明らかになった。記事で書かれていなかった難しい言葉を使った学習者の日本語のレベルが高いことも明らかになった。

「コラム④」の授業は、コラムを活用した授業の4回目であり、学習者はこの授業の形式に慣れたため、授業の難易度を高め、ディスカッションの前にテキストの内容に関する質問をした。学習者の回答から、内容の理解度が高くなったと言える。また、「コラム④」の授業から授業の形式に慣れることで、学習者のディスカッションは活発になり、怖がらずに自分の意見も言えるようになった様子が明らかになった。

授業タイプ１（コラム①、②、④の授業）の効果について

この三つの授業は、コラムの文章構造、文法、表現、新出単語等の説明、コラム記事の読解とディスカッションという形式で行ったが、それぞれの授業で利用された記事によって、それぞれの授業の効果には異なっているところがあると考える。具体的に言うと、「コラム①」の授業の効果は：

① 学習者のアカデミックな文法や日本の職場で使われている単語の知識の獲得
② 「起承転結」という日本のテキストの構造の理解。それによって学習者のテキストの内容の理解が深くなったこと。
③ 「コラム①」の記事に書かれた新入社員の問題という日本の社会問題についての知識獲得

学習者のコメントによると、「コラム①」の授業に次のようなことが役に立った。

S13 「私達準卒業生としては、ありがたい知識と思います。」（台湾；JLPT：N2）

S16 「この前知らなかった日本会社の状況を少し知るようになりました。」（中国；JLPT：N1）

S39 「『起承転結』を習いました。以前はずっと知らないでした。とっても勉強になります。」（中国；JLPT：N1）

S37 「日本語らしい新聞の表現を勉強できるから、いいと思います。」（中国；JLPT：N2）

S33 「記事のテーマは勉強になりました。『否定より肯定が大切』という態度を勉強してポジティブな価値観をならいました。」（中国；JLPT：N1）

S23 「新しい academic writing の用語を勉強した」（香港；JLPT：N4）

「コラム②」の授業の効果次であると考える：

① 珍しい表現、季語、俳句、などの知識の獲得
② 起承転結についての知識を活用し、テキストの内容を分析する能力の向上。

学習者のコメントは次の通りである。

S53 「『ゆふべ』とかはいく（俳句）につかうことばをまなんでよかった。」（韓国；JLPT：無）

S43 「面白いです。俳句とか、中国の歌とかいろいろな流行語習った…」（台湾；JLPT：N3）

S33 「俳句とか文学知識は勉強になってよかった。」（中国；JLPT：N1）

学習者は感想シートで何を習ったかを具体的に書いたため、様々な単語は本当に記憶に残ったと言える。

「コラム④」の授業の効果としては次の点を挙げる：

① 新しい単語や文法の知識の獲得
② 記事の内容を分析する能力の向上
③ テキストにある問題を明らかにする能力の向上
④ その問題に関する疑問を表す能力の向上

学習者はコメントで「コラム④」の記事にある問題に関する意見や疑問をよく書いていた。

S28 「制服を着ることは強制する必要あるかどうかという問題を論じている。制服についての問題は中国でも社会話題になっていて、反対の方も説得力ある理由を持っている。」（中国；JLPT：N2）

S7 「制服があるかどうか、悪い点もいい点もあるので、制服がひつようですか？というのはまだ本当に決められない。」（タイ；JLPT：無）

S9 「子どもの体はまだ成長しているので（今年買った服はたぶん来年、再来年、小さすぎになるかもしれません）、アルマーニではなく普通の制服を着てもいいと思います。」（台湾；JLPT：N2）

Ⅳ－Ⅱ．授業タイプ２（コラム③の授業）

タイプ２の授業時間は90分であり、授業目的は、「文法や表現の説明なしに、記事の内容を理解できるようになること」「同じ日における３つの全国紙の記事を比較することで、その共通点や差異をわかるようになること」である。そのため、まず日本の全国紙や記事のテーマについて説明し、グループワークを行い、各グループの発表の後、三つの新聞の記事の相違点や共通点についてのディスカッションを行った。

日本の全国紙について

「コラム③」の授業でまず、「朝日新聞」、「読売新聞」、「毎日新聞」、「日本経済新聞」、「産経新聞」という日本の５つの全国紙について説明し、その次に、新聞各社の方針が異なり、同じ事柄についての記事の書き方も異なっているということを学習者に伝えた。

外国人日本語学習者は、同じ出来事を取り上げた報道

が、新聞各社によってどのように異なるのかを比較しながら読み、新聞社間の比較と同時に、ある事件が、事件として報道されている記事とその事件を踏まえて書かれたコラムでは、書き方にどのような差異やどのような共通点が生じるのかについて読み比べることが不可欠であると考えた。

複数の新聞社の同じ事柄について

複数の新聞社の同じ事柄として東日本大震災を選択した。2011年３月11日の東日本大震災は日本人にとって今までも忘れられない災害であり、今までも話題になっているため、留学生も東日本大震災について知るべきだと考えた。今年（2018年）の３月11日の様々な全国紙の記事のテーマも東日本大震災についてであったため、「コラム③」の授業の教材として、毎日新聞「余録」2018年３月11日「絶えまない地震にゆられつあかき目の…」の記事、日経新聞「春秋」2018年３月11日「東京の隅田川に近い回向院『日本一の無縁寺』を名乗る…」の記事、産経新聞「産経抄」2018年３月11日「歌人の永田和宏さんに悲痛な一首がある。…」の記事という７年前の被害に関する記事を選択した。

このテーマを選ぶ際、留学生は2011年３月11日の東日本大震災について聞いたことがあると考え、この災害についての記事に興味があると考えた。しかし、実際に、学習者のコメントによると、このテーマに関する感想が異なっている。

S4　「日本のそんな大きい事件をならうことはとても大切だと思う。」（オーストラリア；JLPT：無）

S19　「東日本大震災も７年経ちましたが、その記憶をわすれることはいけないと思う。」（中国；JLPT：N2）

S40　「テーマはつまらなかった。みんなが東日本大震災にあまり知らなかったので。」（台湾；JLPT：N2）

S54　「昔のテーマも興味がありますが、もっと最近の記事が知りたいです。」（韓国；JLPT：無）

東日本大震災は難しく、感情的なテーマであり、この災害についての記事を読むのはかなり難しいと思う。東日本大震災についての現在の記事の内容を理解するため、まず、2011年３月11日の東日本大震災についての説明が必要だと考え、「コラム③」の授業にグループワークが始まる前に写真を見せながら東日本大震災について説明を行った。

グループワークについて

グループは三つであり、各グループは2018年３月11日の毎日新聞「余録」、日経新聞「春秋」、産経新聞「産経抄」という東日本大震災についての記事を一つずつ担当していた。「コラム③」の授業の特徴の一つは30分のグループワークである。その30分で学習者は次のポイントについて考えた：１．記事のキーワード、２．起承転結によっての分析、３．記事のテーマ、４．筆者の言いたいこと、５．記事の内容の簡単な紹介。また、「コラム③」の授業には文法や表現の説明がないという理由で、それぞれのグループのために文法や表現の詳しい説明リストを作り、学習者はグループごとで文法や表現の意味を確認する作業があった。

各グループが担当した記事には難しい文法や難しい単語があり、学習者にとってこの授業の難易度が高くなったと考える。

それ以前のコラムを活用した授業にあったディスカッションと比較すると、学習者は積極的に記事のテーマ、筆者の意見やキーワードについてディスカッションをしたと言える。留学生のコメントによるとグループワークに対する感想は次である。

S19　「チームワークの形で進むと理解深くなる。」（中国；JLPT：N2）

S40　「グループで記事についてキーワードやまとめを探しながら、話を合うことがよかったと思う。」（台湾；JLPT：N2）

S51　「グループに分けて、グループワークするのはいいと思います。」（ミャンマー；JLPT：N2）

それぞれのグループは別々の記事を担当していたため、グループワークの目的は、グループで文法や表現の意味、テーマ、筆者の言いたいことを明確にすることだけではなく、この記事を読んだことがない他グループにわかりやすく記事の内容を伝えることであった。

各グループの発表について

グループワークが終わったのち、それぞれのグループは他のグループの前で、記事のキーワード、記事のテーマ、筆者の言いたいこと、記事の内容について発表した。発表の時間は10分ずつであった。

各グループの発表は異なっていたが、共通点としてはキーワードの適切な選択、記事のテーマや筆者の意見の綺麗なまとめ方などがあると考える。しかし、記事の内容の発表によって各グループの学習者の日本語レベルが明らかになっていると言える。上級レベルの学習者がいたグループの発表やまとめの日本語はより自然であり、記事にある表現だけではなく、同じ意味のある言葉もよく使用し、その学習者の言い換える能力は高いと言える。

複数の新聞社の比べについて

各グループの発表が終わってから、全員で三つの新聞の記事の共通点や相違点について考えた。学習者にとって同じ事柄についての複数の新聞社の報じ方に共通点を探すのは難しかったが、相違点はすぐに見つけることができ、三つの新聞社の特徴ははっきり理解できたと考え

る。

共通点として学習者は次の点を挙げた。

・三つの記事のテーマは東日本大震災、災害の記憶について、である。

・三つの記事の筆者は災害のことを忘れないで、復興は大事だということに注意を払った。また、災害から7年がたっても、影響を受けている人はまだいるので、災害を忘れないようにというメッセージは三つの新聞社にある。

相違点を考える際、学習者は記事の内容、書き方（客観的か感情的）やわかりやすさは異なっていると述べた。学習者は次のような違いを指摘した：

① 毎日新聞「余録」の記事の筆者の意見は一番わかりやすく、書き方が客観的

② 産経新聞「産経抄」の記事は一番わかりにくく、書き方はとても感情的

③ 日経新聞「春秋」の記事の書き方の難しさは普通であり、客観的

同じ事柄について、複数の新聞社の記事を読み比べることに関する学習者のコメントは次の通りである。

S12 「たくさんの新聞社のニュースの書き方がわかりました。」（台湾；JLPT：N2）

S31 「本日の授業は、産経新聞、毎日新聞、日本経済新聞などの三つの記事を勉強した。グループと一緒に記事のテーマと筆者の言いたい事などを討論したことはおもしろかった。テーマを見ると、この記事の内容はすぐ理解することができる。三つの記事のテーマは全部東日本大震災について、人に考えさせたい。」（中国；JLPT：N2）

S51 「三つのグループは違う視点で地震のニュースを討論することはいいと思います。地震から色んな人は違う感想が持つことです。」（ミャンマー；JLPT：N2）

コラム③の授業の形式の効果について

「コラム③」の授業の形式は他の授業と異なり、学習者にとって容易ではなかった。この授業の中心になったのは、文法や表現の説明ではなく、学習者のグループワークであった。つまり、受動的であった学習者の態度は能動的に変化した。「コラム③」の授業はコラムを利用した日本語の三回目の授業であるため、「コラム③」は学習者にとって今までのコラムの授業で得た知識やコラムの記事の分析の能力を活かす機会であったと考える。学習者はコラムを読むことに慣れてから、自分の知識を活かすことで、記事のテーマ、筆者の意見を自分で明らかにすることができるようになったと言える。

結果として、この授業はテーマが難しかったため、日本語中級レベルの学習者のディスカッションへの参加度は低く、授業の効果は新しい語彙や文法を覚えることに限られてしまう。しかし、上級レベルの学習者にとって、難しく、複雑な表現が多くても、「コラム①」や「コラム②」を通じて記事の内容を分析してまとめる力や発表の能力を磨くことができたと考える。また、記事にあった表現だけを使わずに、その記事を読んだことない人に内容をわかりやすく伝達することもできるようになったと言える。もう一つの効果として、同じ事件・出来事に対する様々な新聞社の記事を読み比べることで、各社の姿勢の違いを分析する能力を磨くことができたことがあげられる。

最後に、「コラム③」に対する学習者の感想を分析すると、「東日本大震災」のようなテーマは重くても、知るべきであるという意見が多かった。また、グループワークという形式でディスカッションするのは面白く、それで自分の理解を深めることができたという意見もたくさんあった。

Ⅳ－Ⅲ．授業タイプ３（コラム⑤の授業）

コラムを利用した日本語の授業は、学習者の日本語能力を向上させるために毎回難易度を上げた。このコースの最後の授業では大きなディスカッションを行ったが、これは留学生の説得力、語彙力、コミュニケーション力、発表力を活かす機会になったと考える。「コラム⑤」の授業ではコラムの読解はなく、授業時間は90分であり、授業の形式は「学校の制服に反対か賛成か」というテーマのディスカッションのみであった。「コラム④」の授業で利用した記事は「学校の制服の意味について」であり、学習者はこの記事を読んでから自分は学校の制服に賛成か反対かということを考えた。その次に、学習者の要望の通りに４－５人ずつで、それぞれ四つずつ「賛成」「反対」のグループを作った。

各グループの宿題は「学校の制服に反対か賛成か」の議論を準備することであった。具体的に言えば、次のことである。

・賛成／反対の理由（２－３つ）やその根拠を考えること

・賛成/反対の発表で使うPowerPointのプレゼンテーションを作ること（賛成／反対する理由の説明）

・相手の意見の理由を予想すること

・相手側の理由への質問・反論を考えること

・賛成／反対の理由シートを記入すること

・PowerPointのプレゼンテーションを見せるために各グループは１台のパソコンを持ってくること

またPowerPointのプレゼンテーションについての詳しい説明を行い、「コラム⑤」の授業の流れも具体的に学習者に伝えた。

授業の初めに４つのディスカッションの場所を作り、

各場所で「賛成」「反対」の一対のグループを作った。つまり、各ディスカッションの場所には１つずつの「賛成／反対」のグループペアがあった。各ペアのディスカッションのセッションは同時に始まり、同時に終わるように設定した。１つのセッションの時間は30分であり、このようなセッションは相手をかえて２回行われた。各セッションの流れは次の通りである。

・５分間賛成グループの発表（PowerPointのプレゼンを見せながら賛成する根拠を紹介する）

・５分間反対グループの発表（PowerPointのプレゼンを見せながら反対する根拠を紹介する）

・10分間ディスカッション（相手側への質問・意見）

・10分間発表・ディスカッションの感想シートの記入

各グループは発表やPowerPointのプレゼンテーションの準備を十分にしており、学習者の発表はとてもよかったと評価できる。各グループは賛成か反対だと思う理由を論理的に紹介でき、根拠として「コラム④」の授業の記事、インターネットにある様々な情報を使用し、グラフ、表、絵、写真などを使い、わかりやすいPowerPointのプレゼンテーションを見せながら発表をした。

各グループの反対か賛成の理由は異なり、留学生は自分の国の状況を相手側に紹介し、自分の意見を積極的に発表した。

学習者の意見の理由は綺麗にまとめられ、「反対」のグループも「賛成」のグループも説得力があり、理由を示しながら発表した。

「賛成」や「反対」のグループの発表の後、10分間ディスカッションが行われ、学習者は根拠を示しながら積極的に議論した。日本語の上級レベルの学習者は中級レベルの学習者と比べて、自分の意見を強く伝えていた。ここからディスカッションを行う際、学習者のレベルによるグループ分けする必要があったと考える。また、議論の際、感情的になった学習者がいた。しかし、議論の後、学生にわだかまりなどは見られなかった。

この「コラム⑤」の授業にはいくつかの効果があったと考える。自分の意見を表し相手の意見を聞き、相手の意見に反論することで、学習者は自分の語彙力、表現力、発表力を向上させることができた。

Ⅴ．アンケート結果

最後の授業の終わりにコラムの読解に対する関心度を図るためにアンケートを実施した。結果、48人より回収することができた。

ここでは、次の二つの質問に関する学習者の会社の回答を紹介したいと思う。

Q1　コラムの授業は自分の日本語学習のために役に立ったと思いますか。

・「はい」 45人（93.75％）

・「いいえ」3人（6.25％）

Q2　これからは日本の新聞のコラムを読んでみたいと思いますか。

・「はい」 35人（73％）

・「いいえ」8人（16.6％）

・　未回答　5人（10.4％）

学習者のコメントは次である。

S19　Q1「グループワークとディスカッションの形を通じて、学んだ文法や単語、使うことができる。」；Q2「いいえ、難しい」（中国；JLPT：N2）

S25　Q1「はい。特別の単語と文法を勉強するからです。もっとアカデミックの言葉を学んだ」；Q2「はい、そうですけどもっとわかりやすいコラムを自分で読んでみたいです。授業の時のコラムはちょっと難しいですから自分で理解が完全にできないと思います」（フランス；JLPT：無）

S45　Q1「はい、日常の単語使い方学べる」；Q2「いいえ、難しい」（韓国；JLPT：N4）

S51　Q1「はい、教科書以外の日本語が知られるからです。話の練習に慣れるからです。」；Q2「いいえ、新聞あまり興味ないです」（ミャンマー；JLPT：N2）

S49　Q1「はい、コラムを読むことで日本語学習できる」；Q2「いいえ、日本の新聞に漢字が多い。漢字を使わない国から来たから、漢字が苦手です。」（：タイ；JLPT：N4）

S36　Q1「はい、単語を学習できる。生活であまり使わない単語、歌、文化を勉強できると思う。」；Q2「はい、日本の文化を理解できると思う。」（中国；JLPT：N2）

学習者のコメントから明らかになったのは、コラムの読解は日本語学習に効果がある一方、新聞に興味がない学習者はコラムを教材として用いようとしないことである。また、日本語のレベルが高くない学習者にとってコラムの記事は難し過ぎるため、これからはコラムを読もうと思っていないこともわかった。逆に、コラムの記事で日本語学習に効果を感じた留学生は、これからもコラムを読みたいという要望が明らかになっている。

Ⅵ．まとめ

コラムを活用した授業の実践には３つの形式の授業を実施し、次の違いが明らかになった。

授業タイプ１（コラム①、②、④）の授業で学習者のテキストの構造の理解を深め、それによってテキストの内容が分かりやすくなったという効果があった。この形

式で記事のテーマや筆者の意見を考える練習を行ったため、学習者のコラムの内容の分析力も上がった。また、文法や表現の詳しい説明で学習者の文法や表現の知識も向上したと考える。

授業タイプ２（コラム③）の授業で、学習者は文法や表現の知識を得たという効果があったが、それとともに、同じ事柄に関する複数の新聞社の書き方、情報の伝え方の違いの理解も得られた。

授業タイプ３（コラム⑤）の授業で、学習者は自分の発表力、コミュニケーション力、情報分析力を生かすことができ、また、ディスカッションの時間が限られていたため、学習者は意見を簡潔に表すことができるようになった。

各形式とも、それぞれ効果があると言えるが、学習者の日本語のレベルにより効果が異なることが明らかになった。初・中級のレベルの学習者にとってタイプ１の形式は一番適切であると考え、タイプ２の形式は困難であり、学習者にとって記事の意味は理解することは困難であった。

また、学習効果に重要な役割を果たしているのはコラムの記事のテーマである。実践研究で、学習者の関心度が高い記事を活用すれば、内容の理解はもっと深まるということが明らかになった。

最後に、各授業を効果的なものにするために、新聞を活用した日本語の授業のコースは特別な順番で行った。普段、新聞の記事を読んでいない学習者にとって「コラム①」、「コラム②」の授業形式に慣れる必要があり、コラムの記事の構造の説明、難しい文法や表現の説明は学習者のテキスト内容の理解のために不可欠であると考える。２つの授業でコラムの記事に少し慣れてから、学習者は自分で文法や表現の説明を読み、理解し、他の学習者とのグループワークをすることで、記事に関する理解を深めたことができたと言える。また、タイプ２の形式で学習者はディスカッションをすることで、同じ事柄についての複数の新聞社の違いを明らかにすることができたと考える。「コラム③」の授業で行ったディスカッションは「コラム⑤」のディスカッションのために必要な準備として考えた。「コラム⑤」の授業はこのコースで難易度が一番高い授業であったため、一番最後に行われた。学習者が「コラム⑤」の授業でディスカッションを有意義なものにするために、ディスカッションのテーマの深い理解が不可欠である。「コラム⑤」の授業のディスカッションは「コラム④」の授業で教材とした記事のテーマに関するディスカッションであったため、「コラム④」の授業の形式は一番最初の授業と同じであった。この形式の授業では、文法、表現、内容の説明を行うため、日本語のレベルに関わらず、学習者は内容を完全に理解できるようになったと考える。

コラムを活用した日本語の学習は様々な授業の形式で行うことができるが、その授業の形式の順番は大事であると考える。

参考文献

１．松崎史周、2005「新聞コラム・テレビ番組を用いた要約の指導」『信大国語教育』15、8-22頁
２．南博、1971『マス･コミュニケーション辞典』学芸書林、251-252頁
３．小原友行，2011「デジタルメディア時代の新聞活用教育」『日本教育方法学会編』40、113-125頁